

竜の眼

エベンキ族のシャーマン

汪麗珍*

エベンキ族はシャーマニズムを信仰する。かつて部族、あるいは村落ごとに、シャーマンがいた。このシャーマンはもとはほとんどが女性であり、あとから男性シャーマンが現れた。エベンキ族には毎年四月に老シャーマンが新しいシャーマンに教義を教える儀礼を行う風習がある。この儀式では主に老シャーマンが新しいシャーマンに伝教するほか、新しいシャーマンを任命することもできる。しかし、部族あるいは村落の老いたシャーマンが死んでから三年以後、この儀礼は始めて行なわれる。老いたシャーマンを継承する新しいシャーマンはだいたい彼(彼女)の直系家族で性質がひねくれ、顔つきが独特であり、体が大きく、また大災難を生き延び、気狂いを感じさせる人である。彼は利口で、動作が敏捷である。部族あるいは村落の年配の人は男女を問わずこの新しいシャーマンを任命する儀式に参加に来る。儀式を行う場所はその部族の居住地の中央あるいは南東の隅である。ある時は新しいシャーマンの撮羅子(白樺の皮で作った小屋)の前で行われることもある。新しいシャーマンを任命する儀式に、その部族の首長はまずあらかじめ用意された薪を点し、人々の前で次のように述べる。

私たちの老いたシャーマンはもう私たちに別れを告げ

彼の靈魂は天空に上がり星斗に変わり

彼の遺骨は大地に残って山になり

※中央民族学院“学報”編集部

私たちの新しいシャーマンはもう神衣を着ており

奇妙で慈しみの皮鼓を手に入れた

彼の血は川より清く

彼の心は月より白く

彼の目は星より明るく

彼の体は山より遅しく

彼をして邪悪なものを払わしめ

彼をして我等に宝物を招せしめよ

首長は話が終わってから、新しいシャーマンを隣の部族あるいは隣村から呼ばれた老いたシャーマンのところに連れていく。老シャーマンは新しいシャーマンを用意された撮羅子あるいは新シャーマンの撮羅子に連れて入り、半時間近く彼に説教する。それから、老シャーマンは彼といっしょに撮羅子から出てきてから人々に次のように表明する。

あなたがたのシャーマンはもう法衣を着、面具を被り、神鼓を手に取り、あなたがたの邪を払ったり、あなたがたに福をもたらしたりし始める。あなたがたは祖先のように彼を尊敬しなければならない。

老いたシャーマンに続けて、新しいシャーマンは次のように表明する。彼は神霊をもって部族あるいは村落の人々を守り、彼らを樺のように遅しく、松のように青く、水の流れのように長く、高山のように丈夫になるように願っている。彼の話が終ると、人々は彼(彼女)に叩頭する。そのとき、呼ばれてきた老いたシャーマンは新しいシャーマンを導いてシャーマンの節で歌を歌いながら、シャーマンの踊りを踊り、たき火のまわりを三回歩き回った。それが終わると、人々は家からもってきた布・肉・お茶・衣などの贈物を新しいシャーマンに捧げ、これによって尊敬と至誠を表す。最後に人々はたき火のまわりに座ってお

のおの一番よい肉や牛乳や酒などを出して、食べたり飲んだり、タバコを吸ったりして、自分の部族あるいは村落に新しいシャーマンが出来たということを祝う。また相撲を取るなど娯楽活動が行われる。

新しいシャーマンは三年にわたって老いたシャーマンに説教を教わってから、始めて正式のシャーマンになる。その時、新しいシャーマンは老いたシャーマンに馬あるいは牛を一匹送る。それから新しいシャーマンは正式のシャーマンとしてはじめて神踊りをして鬼を駆逐する。その時、シャーマンはまず誰かに羊の肩の骨をたき火の上に置いてもらって、帯でこれを焼く。骨が骨灰になってから、彼自身が少し持ち上げ、しばらく見ながら、どこからきたどんな化け物がどんな悪いことをしたのか、誰にどんな災難をもたらしたかなどを話す。同時に、人々に草あるいは葦で各種の化け物を作ることを教える。それから、彼らは

これらの作られた化け物を火に投げ、化け物を焼き、禍根を除いた。これと同時に、シャーマンは法衣を着、神帽を被り、単面の皮鼓を手に取り、鼓を叩きながら、シャーマンの曲で歌を歌い、それにあわせて踊る。もし病人のために踊るならば、病人が寝つくまであるいは少しよくなるまで、ずっと踊る。昔、エベンキ族はシャーマンに鬼を駆逐して病を直してもらった時に、黒い羊を一匹殺した。シャーマンの神踊りが終わってから、人々は彼にわずかなお金や銀など渡した。そのほかに儀式を行うとき、オボを祭るとき、あるいは子供が無事に生きるために祈るとき、エベンキ族はシャーマンを呼び彼に神踊りを踊ってもらう。これらの現象をエベンキ族の原始意識で解釈するならば、シャーマンのまわりにさえいれば、あらゆる不幸を避けることができるということになる。

(胡泰山訳)

新刊紹介

張銘遠著

『黄色文明—中国文化の機能と類型—』

近年、中国では民俗学関係の本が数多く出版されている。その中で筆者の北京師範大学民俗学博士課程での同級生、張銘遠氏の『黄色文明』は最も注目されてよい著作の一つである。

住居、飲食、服飾、婚姻習俗、家族社会、宗教慣習などの15章から成る、本書は民俗学の狭い範囲を乗り越えて文化人類学の視点から中国の民俗事象を全体的な中華文化体系の中に位置づけて、その文化機能と発展の法則を指摘した。著者は文献資料と現地調査の豊富な資料によって中華文化は黄河文明を中心とした農耕文化であると述べた。黄河文明の挽歌である『河殤』は古い黄河文明を全般的に否定したのに対し、『黄色文明』は黄河文明の歴史的役割を肯定し

ながらその欠点を批判したのである。

著者は、民俗学を単純な古代文献と原始遺跡による“残存物”の学問とすることに反対し、歴史と現在のつながりを強調して民俗学研究者たちに現代社会に目を向けるようにと声高に提唱している。著者の民俗学研究成果を導入しながら、中国民俗学を体系的な新地平へ導くという試みは注目される。

(色音)

A 5 判 260頁上海文芸出版社
1990年3月刊